

一人ひとりの「知」をしっかりと見守め 受験に必要な「力」をきめ細かく育てる

2006年開設の大学進学塾、グノーブル。開設からまだ日が浅いにもかかわらず、2008年卒業の 期生232名中、東京大学50名、国立立大医・慶大医28名など、有名大学の合格実績がめざましい。注目の進学塾です。「夢を叶えるための能力を伸ばす」「生き生きとした授業空間」「一人ひとりとつながる」を掲げるグノーブルではどのような指導を行っているのか。代表である中山伸幸先生にお話を伺いました。

子どもの成長を見据え
真に必要な知の力を育む

東京大学をはじめ難関大学への合格実績が順調に伸びていますね。まずはグノーブルとはどのような塾なのか、お聞かせください。

中山 合格実績が伸びているのはたいへんうれしいことです。しかし、わたしたちは大学合格だけをめざしているわけではありません。確かに、わたしたちは生徒たちを志望校に合格させるために全力を尽くしています。しかし、大学に受かることだけを目標にした、単なる知識の詰め込みや、子どもたちを圧倒するためにやたらむずかしい問題を課するような指導・授業は行っていません。



中山伸幸先生

かつてのように、有名大学に合格し、一流企業に入りさえすれば、ある程度安定した生活が約束されるという時代であれば、そういう指導・授業でもいいかもしれません。しかし、現在では、大企業といえども合併や倒産が当たり前となっています。また、人類が抱える難題に直面せざるを得

ない現在の世の中を見ればわかるように、大切なのは大学に合格することではなく、大学入学後に自分の力をどう伸ばしていくかではないかと、わたしたちは考えているのです。

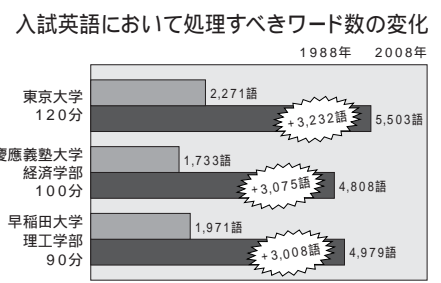
東京大学をめざす場合も、合格して終わりではありません。東大合格を究極の目標にしていると、目標達成後に燃え尽きてしまうことにもなりかねません。じつは、そういう学生が少なくないという話も耳にしています。重要なのは入学してからいかに活躍できるか、いかに生き生きと勉強を進められるかです。わたしたちは、生徒たちが将来を切り開いていくために必

要な知力を身に付け、大学入学後も活躍できるような授業を心がけています。

時代の要請に応えるべく
大学入試英語も激変している

具体的にはどんな授業を展開なさっているのでしょうか。

中山 わたしが担当している英語で説明しましょう。まず、国立立大も私立大学も、社会状況の変化に伴い、英語の出題傾向が変わってきています。たとえば、センター試験が行われるようになった1990年、英語の問題で使われたワード数は2393語でした。ところが2006年には3262語になり、2008年には4130語と激増しました。



1988年の東京大学についてはリスニングテストが行われた文系用試験をカウント。また、早稲田大学については旧・理工学部と、現在の基幹理工・創造理工、先進理工の3学部の試験(問題は共通)を比較している。(グノーブル・中山先生調べ)

各大学の試験でも増加傾向は著しいものがあります(図参照)。

かつての問題では、英語の運用能力よりも、語彙の暗記量や、入試以外では役立ちそうにない文法問題のパターン演習量が問われていました。しかし、現在では、高速かつ正確に英文を読みこなし、日本語を介さずに情報や知識を吸収できる力、明快な英語で的確に伝達できる力が問われています。端的にいえば、「英語が使えるかどうか」が試されているのです。

大学進学までに、どのような能力を身に付けておく必要があるのでしょうか。

中山 言語学には、日常言語能力(BICS: Basic Interpersonal Communicative Skills)、認知学習言語能力

(CALP: Cognitive/Academic Language Proficiency)という概念分けがあります。実用的な英語という、まずはペラペラ話せることを思い浮かべがちですが、じつは、日常言語能力のみを高めても、学問としては通用しません。国語にたとえるなら、仮に学校で国語の授業をまったく受けなくとも、おそらく日常会話には困らないでしょう。けれどもその日本語力では学問を進めていくことは困難です。それと同じです。

流暢な会話力は大切です。しかし、有名大学を受験しようとしている子どもたちは、海外で買える物ができるよようになることをめざしているわけではないはずです。わたしは、抽象的な思考を行うのに必要な認知学習言語能力を向上させることが必要だと感じています。

認知学習言語能力は奥が深く、積み上げていくのに長い時間がかかります。言葉と思考は一体になっているのですから当然です。また、意識して鍛えないと身に付きにくいものでもあります。

これまでかなりの人数の帰国生を指導した経験がわたしたちにはありますが、流暢に話せるにもかかわらず、じつは学習内容をほとんど理解できていない、というケースも珍しく

ないのです。その点からしても、「英語を使って、深く高度な思考が行える力の育成」がわたしたちの使命だと痛感しています。

大学受験においても、またTOEFLでも、高速で言語処理ができ、さらに、きちんと正しく思考できる力が問われるのです。

学問を進めるために不可欠な基礎力が抜け落ちている生徒が多い

そうしたなかで、最近の中学生や高校生をご覧になって、どのようなお感じになりますか。

中山 高校2年生くらいになって、グノーブルにやってくる人も少なくありません。そろそろ本気になって勉強しようかと考えるのでしょう。わたしも、そうした人たちに季節講習や面談で会っていますが、基礎学力が

大きく抜け落ちていることに驚くことがたびたびあります。多くは、狭き門をくぐり抜けて有名中学や高校に通っている生徒たちです。もともと勉強嫌いなわけでも理解力が低いわけでもないので、その生徒たちが、どうしてこれほど基礎学力が抜け落ちているのかと悲しい気持ちにさえなることがあります。

中学・高校時代に土台となるべき基礎を築いておかなければ、大学に入っても、その上に大きな「建物」が建つはずがありません。その生徒にとってはとても重大なことです。

わたしたちの経験上、基礎的な知識が身に付いていないお子さんは、自主性を重んずる校風の学校に多いように感じています。また、先取りをしている塾や、とにかく問題を解かせる塾にお通いだっただお子さんは根本の理解が欠けていることがありまます。そもそも勉強が「作業」になっっていて、深く考えることを楽しめないという深刻な状況になっている場合もあります。

良い指導者がいてこそ
質の高い学習効果が得られる

グノーブルではどのような授業を心がけているのか教えてください。

中山 わたしは、良い塾には三つの



